思いっ切りスマイル

大輔華子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
思いっ切りスマイル

【Ｎコード】
Ｎ０７６２Ｓ

【作者名】
大輔華子

【あらすじ】
東北地方の、とある片田舎から家出して上京した三原華月。数奇な『おとな体験』を経て、彼女は人に得られない何かを手にする。無言ダンテ先生の『Ｓｍｉｌｅ Ｊａｐａｎ』に共感しての作品投稿です。

【華】

三原華月

東北地方の片田舎の漁村で中学卒業までを過ごした三原華月（みはらかづき）は、今春仙台市にある県立商業高校に進学した。

今年閉校となる中学校の分校を最後に卒業したほとんどの同級生は、その中学から歩いて小一時間のところの距離にある県立の普通科高校に進むが、華月は一昨年生まれた、年のかなり離れた妹の子守に明け暮れる生活に辟易（へきえき）していたので、ゆるやかな親の反対を押し切り仙台で思い切って一人暮らしをすることに決めた。

華月にとっての仙台の記憶はこれまでただ一度だけ、嫌な思い出しかない。

華月は、小学校低学年のとき、父親の運転する軽自動車に乗せられて仙台に連れて行ってもらったことはあったが、そのときに親戚を駅に迎えに行く父の手を離れ迷子になって保護され、夕方まで泣いていたことがある。

およそ七年ぶりに見る光景は高校生になる華月にとってすこぶる魅力的であり、怖いところでもあった。しかし、見るものすべてが普段見ているテレビに映っているような光景であり、それが現実に目の前にあるということは華月を適度に緊張させていて、どちらかと言うと恐怖感よりも好奇心のほうが気持ちの先に立っていた。

華月の父は、仙台市内での借間の段取りと入学手続きまでは一緒にしてくれたが、最初の仕送りの二十万円を渡されたっきり、それから先のことはほとんど保護者がいないに等しいような状況で、すべて華月自身が自分で手続きせざるを得なかった。

入学前の説明会は皆父兄と一緒であったが、華月だけは一人だった。

それから、制服や体操着の手配、鞄や靴や文房具、その他諸々の購入。

コンビニでの払い込みくらいは教えられながらできたが、高校生

になったばかりの子にすべてを準備させることは到底無理なこともあり、華月は説明会のときに話を交わした一緒に入学する女子生徒の母親に全面的に頼り、何とか学校生活に入っていくことができた。
構内には賄い付きの女子寮・男子寮がそれぞれ有り男女合計十名の入寮者がいたが、最初の段階でこの手続きを見落としていたので、華月は普段の食事も昼の弁当も、洗濯などもすべて自分で準備しなくてはならず、このことも学生である彼女には無理があると思われた。
洗濯物がたまる一方で、お弁当がいつもコンビニ弁当だった華月は、高校一年の夏休み明けくらいの時期から、次第に同級生から無視されるようになり、男子学生からはいじめを受けるようになった。
いわゆる暴力的ないじめではなかったが、それは華月にとってもっと厳しいものだったかもしれない。男子生徒から嘘のラブレターをもらい校舎の隅で日が暮れるまで待たされたり、教科書を隠されたり、机に誰が使ったかわからないような生々しい生理用品を並べられたり、体操着や上履きへの落書きや椅子の画鋲などは日常のことであった。
華月の我慢強さは母親譲りであったので、決して怒ったり泣いたりはせず、意識して笑顔だけは絶やさずにいたため、逆にそのことがますます皆には気持ち悪がられ、だんだんといじめはエスカレートしていった。
華月は高校一年の二学期修業式の日に、みずからの意志で『退学届』を担任の先生に提出し、そのとき初めて声を出さずに涙を流した。　同級生の女子生徒は一様に驚いていたが、式の最中に退学の事務手続きを終え、再び式場に戻った彼女が最後に校門を去るまで声を掛ける生徒は一人もいなかった。
担任の先生は校門まで送ってくれたが、「がんばれよ」と一言だけ言ってすぐに戻っていった。
華月は口をへの字に結んだまま自分の借間へ戻り、小さめの布製のスーツケースに最低限の衣類や洗面具などを入れふたをして、残

りの荷物をまとめて段ボール箱へ詰め込み、そこに両親への手紙を入れ実家へ送った。

華月は父から最初に貰った入学時の金の残りと今月分の生活費として通帳から引き出した金、合わせて十八万円を封筒に入れ制服のスカートのポケットに入れた。

そのあと、このとき初めて買ったほうきで部屋を掃除した。掃除が終わり、畳に座って窓の外から見える雲の流れを見ながら、退室の手続きに来る不動産屋を待った。

すべての手続きを終え、部屋を去るときに華月はこの日二度目の涙を無言で流した。

上野駅にて

師走月の上野駅は歩く人波でごった返していた。
駅構内スピーカーからはいくつもの声が騒がしく流れていて、それに隣のホームの発車音が重なり、喧騒に慣れていない華月は思わず耳を塞いだ。
華月は正面の大きな広小路口の改札口から荷物を転がしながら出て、人の流れのない隅のほうに歩いていってそこで『ふうっ』と一つ大きなため息をついて立ち止まった。

――これからが、私の本当の始まり。今までは飛行場の滑走路。

華月は、仙台市内の借間で最後に書いた日記の言葉を思い出していた。
構内のホールの外にはいったい何があるのか、華月にはほとんど想像ができなかったが、とりあえずは今日から住むところと働くところを探すことが先決であることくらいはわかっていた。

――テレビで見ていたような、ホームレスにだけはなりたくない。

構内の出口まで百メートルくらいあったので、人波の流れを避けながら再び荷物を転がして歩き出した。出口にかかるかかからないかというところで、華月は背の高いスーツ姿の男に声を掛けられた。
場所は上野駅の遠距離列車のホームから出たところ。華月の姿は私服ではなく学生服を着て、手には小さめのスーツケース。そして顔は東北の田舎の方でよく見かけるような赤い『りんご』のほっぺた。メモのような紙や、地図や、携帯なども一切手に持たず、ただきょろきょろとしながら、とぼとぼ歩いている姿。あたかも『私は家出娘です……』という看板を掲げて歩いているような格好である。

「お嬢さん。誰か人と待ち合わせ？」
華月は知り合いのいるはずもない初めての地で突然声を掛けられ、自分ではないと思ったが、その男のほうを見るとどうやら自分のほうを見ている。
「いいえ」
男はわざと驚いたような顔をして、そのあとすぐにっこりと微笑んで言った。
「今日泊まるところとかあるの？」
「まだわかりません」
「ん？　まだわからないって……。変な言い方だね。いつかはわかるわけ？」
華月は少しうつむきながら答えた。
「いつかは……あの。わかりませんけど……」
「そうか。きみ。お金、全然持ってないんだろう？　全然」
完全な誘導尋問である。遠くから出てきた家出少女がまったく金を持っていないことは普通有り得ない。
華月は思わず自分のスカートの右ポケットを抑えながら、
「いいえ、お金は持ってます」と言った。
「嘘！　セイゼイ持っていたって二・三千円くらいだろう。そんなもんじゃ持ってるって言わないよ」
「もっと、ちゃんとありますから」
「じゃあ見せてごらんよ。そのポケットの中」
華月はポケットから十八万円の入った封筒を出して中味の札を半分引き出して男に見せた。
「いくらあるの？」
「十八万円よ」と華月は男の誤解に抗議の目をしてみせる。
「そうか。疑ってごめんね。そんな大金一人で女の子が持っていたら、ここではすぐ盗まれちゃうよ。すぐに」
そう言って男は背広の内ポケットから自分の札入れを出し、その中から一枚の紙を取り出した。それからその紙にペンでなにやら字

を書き込み名刺入れから出した名刺と一緒に華月に差し出して見せた。

その紙には、こう書かれてあった。

『お預かり証・金壱拾七萬円也　正にお預かり致しました・三菱東京ＵＦＪみずほ銀行　上野広小路支店』

上野広小路支店の脇には角印社版の朱印が押されてあった。金額のところだけは手書きで、その他は活字である。また、名刺は、『三菱東京ＵＦＪみずほ銀行　上野広小路支店　支店長代理　瑞穂浩一郎』とあった。

「銀行の人？」

「そうですよ。そこの上野広小路支店の……ああ、知らないか」

男は続けて言った。

「とりあえず危ないから十七万お預かりしましょう。残りの一万円は取られないようにしっかりね」

そして銀行の封筒らしきものを出して、そこに十七万円入れるよう促した。

「すぐそこ、五分くらいのところに店舗がありますから、カードと通帳はそこで作りましょう。それまではこの預り証で……」

「はい」

華月は十七万円を移し入れた封筒を男に渡し、預り証と名刺を受け取った。出口をくぐった先三〇メートルくらい先に別な背広の男がいて、手を振っている。

脇にいた背の高い男は、

「ああ、支店長だ。ちょっとここで待っててくれる？」と言って華月の渡した封筒を持って手を挙げている男の方へ走って行った。

あっという間に人ごみに紛れて男の姿は二人とも消えた。

華月は十五分くらい待ったが、男は現れなかった。華月はうろうろと出口付近の男を捜したが、そのうちまた口がへの字になってき

た。そして封筒に残った一万円札を確かめ、小さく折って再びポケットにしまった。

正社員募集

夕暮れのせまる中、繁華街の雑踏に混じって華月は歩道のない小路に迷い込んでいた。大きなネオンはまだ点いていないが、丈の低いネオンは、そこかしこでちかちかと揺れていた。

小路を抜けると暗いビルの一角でひときわ明るいガラス張りの事務所が見えた。明るいサッシには『正社員募集』という貼り紙があった。華月は荷物を転がしながらその光に吸い込まれるように歩いていった。事務所には人がいないので中に入るのをためらってうろうろしていると、外にいた太った中年の女性が声を掛けてきた。

「用事なら中に入って待ってらっしゃいな」

華月は他に頼るところもないので、言われた通り勝手に事務所の中に入っていった。

数十分くらいたっただろうか。もうすっかりあたりが暗くなったとき、タバコを吸いながら一人の体のかなり大きな太った男がガラスの前で中の華月の姿を覗き込み、店頭でタバコを棄てて中に入ってきた。

「お譲ちゃん。何か用？」

華月は男の体の大きさに圧倒されて一度は怖くなったが、何故か急に寂しくなってきてまた口がへの字になった。太った男は、華月の格好と表情を見て、一目で家出娘が行くところを失って迷い込んできたな、と察した。

「お腹すいてないかい？これから飯食いに行くんだけど、一緒に行こうか？」

また華月は為すすべもなく、「はい」と応えた。

近くの中華料理屋に連れていかれると、そこには二人の男が小あがりで向き合ってビールを飲みながら餃子や炒め物を食べていた。太った男は、その二人に『おうっ』と軽く声を掛けて華月と四人掛けのテーブル席についた。

二人の男は反対側の窓のほうを見ている。
太った男は二人に話しかけた。
「おう。今日はいい男がいたぞ。あれは最高だ。仕事ができる」
「ああ。そうですか。それは良かったです」と話しかけられた二人のうちの一人。
「明日、事務所に来るからそれから仕事の分担を考えよう」と太った男。
「そうですね。じゃあまた明日……」　話しかけられた男たちは二人とも反対側の窓を向いたままだ。その格好で立ち上がり、店の入り口のほうにカニのように横歩きを始めた。
怒り出したのは太った男だ。
「こら！　お前らなんだその態度は！　人を小バカにしてるのか！」
「いえ、めっそうもない」
「このやろう！」
太った男はカニ歩きの二人の男の背中の襟首をつかんで力任せに引き寄せた。
店の主人が言った。
「店の中でやめてくださいよ」
次の瞬間、二人の男の顔を見るなり華月が叫んだ。
「あらっ？　昼間の銀行の人。それに支店長さんまで！」
「銀行の人だとぅ？」　太った男は、じろっと二人の男の顔を見た。
「ああよかったあ。駅ではぐれちゃったのね。私どうしようかと思って」と華月。
「てめえらまたオレに隠れて、勝手に小遣い稼ぎしやがったな！」
太った男が怒鳴った。
事務所に戻ると太った男は、華月には自分が元銀行の本店の人間だと言い、自称支店長補佐の男から金の入った封筒を取りあげ、華月に返した。封筒の中身は三万円だった。
「十四万円貯金したの？」と華月。
「そっ……そうだよ」と自称支店長代理。

一目惚れ

その日、華月は太った男が寝泊りしている事務所の二階の部屋で、パジャマを与えられそれに着替えて寝させてもらった。翌朝華月が目を覚ますと、下の事務所のほうから何人もの男性や女性の入り混じった声が聞こえてきた。

二階の部屋のちゃぶ台の上には、朝食のご飯と味噌汁、それに目玉焼きが用意されている。脇には、『食べたらタンスの中のどの服でもいいから気に入ったものを着て事務所に下りてきなさい』と書いたメモがあった。華月は書かれている通りに食事を済ませ、食器を洗ってから、自分に合うサイズのジーンズ上下を見つけて着替え事務所へ下りていった。

事務所はデスクが六個一つの『シマ』になっていて、男性が三人席について何やら仕事をしている。そのうち一人は電話応対、離れたところに向かい合わせのデスクが一対あり女性と若い男性が向き合って仕事をしている。

可動式パーティーションの奥を覗くと、昨日の太った男がデスクに座っていて、その脇には小さな応接セットがある。

「おはよう。じゃないな。もう十時だ」と太った男は言った。

「おはようございます。ちょっと寝すぎちゃったデス。へへ」

華月は太った男に怒られそうな気がしてあえて子供っぽくした。

「長旅で疲れていたんだろう。君には今日から仕事をしてもらうからね」

いくら田舎者の華月でも、この事務所が銀行の店舗でないことくらいはわかる。自称元銀行の本店の人間という太った男は、仕事の内容について説明を始めた。

説明によると、この事務所は銀行の孫会社と関係がある会社を運営しており、佐竹コーポレーションという。関係がある、というのがどんな関係かはよくわからない。

社長は説明している太った男本人で、名を佐竹という。
この会社は何を仕事にしているかというと、社長の佐竹は『男と女の何でも屋である』と言った。
華月は、これを聞いて何だかよくわからなかったが、思いついた言葉を言ってみた。
「フーゾクですか？」
「……」
佐竹は、遠回しな言い方をしたことに後悔したが、すぐさま説明を続けた。
「厳密に言うと、フーゾク的人材派遣会社だ」と佐竹。
「売春の斡旋ですか？」と華月。
「……」
さほど広い部屋ではなく、パーティーションも上のほうがガラス空きなので、声は筒抜けだ。
そのとき事務所の方で男の声がした。
「ごめんください」
女性がパーティーションの脇から顔を入れて「社長。勝野さんがみえました」と言った。
「おうっ。こっちに通してくれ」
失礼します、と言いながら応接セットのほうに入ってきた男性を振り返り、華月は全身に電流が走るような感覚を味わった。
その男性は、年のころ二十代後半くらい。身長は特別高くはないが、見たところでは百七十センチ台の前半くらい。
しかし、華月が感じるところ、これ以上、上がないと思われるような限界に近い『超超、美形』。甘いマスクの中にきりりとした男らしさを蓄えている。
華月は、一瞬で顔が真っ赤になり、緊張して下を向いた。
これを見て佐竹は、
「華月ちゃんっていったかな。君は純情だねえ。感情が百％顔と全身に出てる」とからかった。

「いっ、嫌です。そんなこと言ったら……やめて下さい！」と華月が顔を激しく横に振る。
もう顔が充血しきってこちらの顔も限界に近い。
その男性はソファーに座って小さくなっている華月に対し落ち着きはらって言った。
「勝野権三郎といいます。どうぞよろしく」
華月はその響きに耳を疑った。

――ええ？　ごっ、『ごんざぶろう』って？　あなた、名付け親恨んでない？

『名前負けする』という言葉をよく耳にするが、彼の場合はどっちが負けているのかよくわからない。三人の話題はやはり彼の名前の話に及んだが、彼の父は子供の人権擁護を推進する民間ボランティア団体の事務長で、子供の名は人権の『権』の字を取って長男が権一（けんいち）、次男が権次（けんじ）だそうである。三男が権三（けんぞう）ではあまりにも安っぽいということで、三男だけ権三郎（ごんざぶろう）になったらしい。
その、ちょっとした遊び心に名前を付けられた『ごんざぶろう』が、売春斡旋の会社にスカウトされ、何か妙な仕事をさせられようとしている。
華月は何故か複雑な気分になった。

ホームシック

佐竹の会社は、いわゆる人材派遣業を営む会社であって、まっとうな仕事も請け負っている。会社の定款には、きちんと『労働者派遣事業』と書かれてあるし、登録されている派遣社員は女性を主体に多いときは五十人くらいにのぼる。

しかし、派遣社員を受け入れる依頼先がややコワイ団体さんに偏っているため、普通の労働者ではなく、女性としての特殊技能をもった労働者の派遣を求められることが多い。

家出少女というのは、他人との関係やしがらみが一切ないという点で、女性としての特殊技能を身につけさせるにはうってつけであった。

華月は佐竹の会社に住み込みで働かせてもらうことになった。当初は経理的な仕事が中心だった。会社に慣れてくるに従って、佐竹は華月を商品として見るようになっていき、しばしば『女』を売ってみないかと話をもちかけた。

華月にとっては自分を拾ってくれた恩人の佐竹の言葉ではあったが、このことに対しては徹底して『ごめんなさい、ごめんなさい』の一点張りで、安月給でも目の前の売春行為に身を染めようとはしなかった。

もしも権三郎がいなかったら、そうでなかったかもしれない。

華月はまだ十六歳。

権三郎は二八歳。

年は一回り、十二歳離れており、権三郎は華月をまだ一人の女性として考えていなかったようだが、華月は明らかに恋愛感情の対象として権三郎をみていた。少なくとも権三郎に知られるようなところでは、どうしても他の男性に抱かれるわけにはいかなかったのだ。

◆◇◆

華月は、初めて実家以外の遠く離れた地で年を越した。激しいホームシックが華月の心を襲い、年が明けてから数日間彼女は意味もなく泣き続けた。そして、何通も何通も故郷の実家へ手紙を書いては送った。

しかし、両親からの返信はすべて佐竹の手によって破り捨てられた。佐竹はそのことを華月へ話し、厳しい言葉を付け加えた。

「今が一番寂しく苦しい時期なんだ。君が社会で自立していくためには、両親の言葉にすがっていてはいけない」

さらに言った。

「一個の女性が自立するということは、『女』としての喜びを知るということだ」

そしてその日華月は『女』になった。

彼女を女にした最初の男は当然のこと、佐竹であったが、そのあと自称支店長代理の男、同支店長、社長の個人的仲間であり派遣先の団体客の四名の男たちがこれに次々と続き、儀式のような宴は明け方近くまで繰り広げられた。

華月は失神しそうになるのを何度もぐっとこらえながら、女が一人で生きていくことの実感を確かめようとしていた。

ヘンな会社ぁ

何の成績かよくわからないが、事務所の壁には『営業成績』と書かれた赤の棒が伸び縮みするグラフがあった。営業マン、すなわち棒グラフの棒の数は、勝野権三郎が増えて今は七本である。目盛の単位は全くわからないが、勝野権三郎が他を圧倒する成績を修めていることはグラフから容易に読み取れた。

気になったのはグラフの下に表が付いていて、猪・鹿・蝶と書かれた欄に数字が記されていることだ。華月が気になって経理の男性に表の意味を尋ねてみると、彼は無言のジェスチャーで示してくれた。

『猪』は股の間を指差したので、どうやら売春斡旋収入らしい。

『鹿』はペーパーナイフを取り出したので、これは恐喝か脅迫に何か関係があるように思われた。

最後の『蝶』がよくわからない。

彼はヒントに困って自分の頭を指差したので、頭脳的なもの？

詐欺？　あたりか……。

「ヒントに困るくらいだったら、はっきり教えてくれたらいいじゃない！」と華月。

経理の男性は言った。

「あのね、これ、社長と営業マンと俺しか知らないのよね。教えたら即、首が飛ぶの。本物の首だよ」

華月は、権三郎の『蝶』の数値が圧倒的に高いことが気になっていたが、それ以上答えを求めるのはあきらめた。

夕方から事務所を出て行った営業マンが、朝方外回りから帰ってきたとき、それぞれの注文に応じて準備していたものを出すことも華月の仕事の一つだ。

Aさんは、コーヒー、夏はアイスコーヒー。

Bさんは、冷たいビールと枝豆。

Cさんは、ウイスキーのロックと虎屋の羊羹。
Dさんは、ポルノ雑誌とティッシュペーパー。
Eさんは、バナナ一房とドクターペッパー。
Fさんは、んまい棒三つとガリガリ君。
そして、権三郎さんは、大き目の手鏡とマイナスイオンのヘアブロウとジンジャーエール。
田舎者でテンネンの華月は、皆にだんだんと『華ちゃん、華ちゃん』とかわいがられるようになり、Dさんなどはほとんど二日に一回は華月に（迷惑だが）色の派手な安物のショーツを買ってきてくれる。
華月はあこがれの権三郎ともようやく気後れすることなく話ができるようになってきた。
そしてとうとう、華月は意を決して権三郎に二人だけのデートを申し込んだ。権三郎はあっさりと『ＯＫ』を返してくれ、ついに華月にとって生まれて初めての、しかも憧れの男性とのデートは実現した。
華月は久し振りに日記をつけた。
『もうすぐ、あこがれの権三郎さんとの夢心地のデート。
事務所二階のバルコニーのへりに腰掛けて読書に耽る私。
頬をなぜる風がとってもさわやか。
さわさわさわ。
ふと、顔を上げると、目の前の木々が風に揺れて、目に映る新緑もまぶしいくらいに艶やか。
すべての世界が、私をつつみこむようにきらきらと光輝いています』
それは一度に華月の人生が変わるほどの大きな出来事だったのかもしれない。

憧れのデート

待ち合わせは、午前十時ちょうどに、足裏マッサージ『おいしいキリンレモン』だった。華月は『何だか変わった場所で待ち合わせだな』と思ったが、それ以上気にはしなかった。権三郎さんを待たせてはならない、と思い十時十五分前にはそこへ行き待合室にいた。

ところが、すぐに華月の番がまわってきてしまった。

「四十分コースですか？それともクイック二十分コースですか？」

四十分コースは、足がちょっときつそうだ。でも、「四十分コースは割安になっています。」と店の人が奨める。

華月はどうしようかと迷ったが、彼が来たらやめればいいと思い、ちょっと足裏マッサージしてもらうことにした。

――とっても気持ちいい……。

すっかり健康の源を取り戻したころ、「お客さん。携帯が鳴ってますよ。」とマッサージ師さんが言った。

――きっと権三郎さんだ！

電話に出ると、やっぱり権三郎だった。

「華月。おまえ、何やってるの？」

「はい？」

「待ってるんだけど。『喫茶キリンレモン』で」

「えええ？！」

華月はさっそくドジをかましてしまった。

「ごめんなさい。私……。どう償ったらいいのか」

「昼飯オゴッてくれれば許そう。腹減ったから」

二人で御徒町駅前のステーキハウスで食事をしてから、権三郎は

華月を競馬場に誘った。そこでたくさんのお金を使い、華月はたっぷりとデートを楽しんだ。そのあと、パチンコ『出るぞ出るぞ』でまたたっぷりと遊んだ。そして、宝くじをたっぷり買って願をかけた。最後に英会話教室に行き、体験教室で英語の勉強をした。

あまり一般的なデートコースではなかったが、とにもかくにも生まれて初めての、デート体験、そして遊び歩き体験を華月は無事修了した。

臨時ボーナス

北海道と沖縄を除く日本列島はほぼ一斉に梅雨の時期に入った。華月が東京の上野へ出てきて半年が経過していた。

華月は相変わらず自らの拒絶意志によって、佐竹が勧めている『商品』、つまり営業マンの取ってきた会社の仕事での『商品』になることは決してなかった。しかし、それとは関係なく、自称支店長補佐、同支店長、社長の個人的仲間であり派遣先の団体客の四名の男たち六人は、毎月一回、ホテルの一室で一同に会し、華月をそこへ呼び出して彼女を思うがままにしていた。

佐竹は、ある日そのことを華月の言動から知り得て烈火のごとく怒りだした。

「あの野郎！　未成年者の『心』を踏みにじりやがって！　許せねえ！　男の風上にも置けねえ卑怯な野郎どもだ！」

華月には、佐竹がその体格以上に大きく雄々しく感じられた。

しかし最後に小さな声で。

「俺だけ仲間はずれにしやがって……。ゆっ許せねえ……」

佐竹は六人全員に対しそれぞれ請求書を発行した。

『請求書・¥三七八，〇〇〇ー・請求内訳・一回¥六〇，〇〇〇ー×六回、同消費税・¥一八，〇〇〇ー　振込先……、期限・六月二〇日（明日）まで、延滞金日歩一割にて申し受けます』

以降、六人の男は華月の体には触れることもなくなった。どこか体が触れただけでも一万円くらい請求されそうな気がしたからである。請求書発行の翌日には全員から入金があった。おそらく仲間内のサラ金あたりから借金の手当てをしたのであろう。入金確認後、佐竹は収入金を折半にしようと言い、華月に約半分の百十三万円を気前よくポンと手渡した。

その金額は、普通に働いていて一度に得られる金額では到底ない。しかし、労働の対価としての金の価値がわからない華月にとっては、それは巷に聞かれる『ボーナス』のようなものであり、普通、初めてのボーナスでは親へ感謝し何か買ってあげるという話を聞いていたので、早速最高級の天然ウナギとズワイガニセットを冷蔵宅急便で実家へ送った。

『なにせ、体一つかかってるんだからね！　味わって食べてね！』というメッセージを入れて。

目を覚ませ！

華月の権三郎への恋心はますますつのっていった。
初めてのデートの後、権三郎とは三回デートを重ねていたが、彼が華月の体を求めることはなかった。
そのかわり、といっては何だが、彼は華月に百万円の金を貸してくれと言ってきた。華月が佐竹に『ボーナス』を貰ったほぼ直後の時期である。
権三郎は金を貸してくれと言ったあと、華月に結婚を匂わせるような言動をした。
「華ちゃん。ボクは君のことを本気で考えてる。将来のことも含めて」
そしてその後、権三郎は華月と熱い口づけを交わした。
華月の心は溶けた。夢心地のそのまた上の雲の上を飛んでいた。
そして彼女は生まれて初めて自分自身を慰めることを知った。彼のことを思い浮かべ膝のあたりに指を這わせていると、太股の内側が妙に熱くなりだしてまるで失禁したかのような激しい様相になった。
もはや彼女は迷うことはなかった。
次の日とその次の日、華月は一度は預金していた残金百十三万円のうち百万円を二日間にわけておろし、事務所に佐竹の居ないときを狙ってこれを封筒に入れて権三郎に渡した。
しかし、その次の日から勝野権三郎が会社に出てくることはなかった。華月は、三日間権三郎が事務所に現れるのを待ったが、彼は現れなかった。
四日目の夕方、華月は権三郎の出勤を待って事務所の出口付近をうろうろとしていたが、そのうちまた口がへの字になってきた。会社での権三郎の仕事は至って順調であったし、不審に思った佐竹は華月に何か知っていることはないかと尋ねた。

華月が百万円を権三郎に貸したことを告げると、佐竹はうつむいて頭を二回横に振った。
「あいつの得意技は何だと思う？」
「知りません」
「あいつは一流の結婚詐欺師だ。カモとなる客のリストを求めて俺らのような業者を渡り歩いている。一連の顧客情報を得たら、俺らのようなところにはもう用はない。ただ無駄に上前をはねられるだけだからな」
「ちょっちょっと待ってください。結婚詐欺じゃないです。権三郎さんは。何回も私をデートに誘ってくれましたし。もし本当にそうだったら私が好きだってことわかってますから、そんなことしなくったっていいでしょう？　ねっ？」
華月は事実を否定することに必死だった。
しかし佐竹は冷静に言った。
「あいつには俺もある意味担がれた。お前がホテルで相手していた男の中にあいつの仲間が『サクラ』として一人送りこまれていたんだ。俺が皆を脅迫して、最後にはお前に金が回ることをうすうす読んでいたのかもしれない。頭の切れるあいつなら考えそうなことだ」
華月はあっけにとられたというより、寂しさに心が振動した。
「嘘です！　絶対！」
「おい。あいつはな。とうに結婚してるんだ。ここに住民票がある。本名だ。目を覚ましてよく見てみろ。」
そこには、住所、千葉県M市●●・・勝野権三郎とその妻　秀美の名前があった。
夫婦とも今年で二九歳の同い年だ。
「詐欺師のくせに定住所構えてるって不思議だと思わねえかい？あいつはな、サツ（警察）の上いってるんだよ。刑事沙汰になっても詐欺で立件できねえんだよ。
やつは。詐欺をただの浮気に仕立てあげている。痴話げんかに付き合ってるほどサツ（検察）は暇じゃあねえんだな。これが……」

そしてさらに華月に意味不明な忠告を付け加えた。
「もう一つ。やつは俺の目も欺くほどの決定的な隠れ蓑(みの)を持っていた。あいつにしかできねえ裏技だ。なあ、華月。悪いことは言わねえ。おめえの力じゃ崩れやしねえよ。だまされたと思ってあきらめな」

ようし、見てなさいよ！

このような場合、だまされて納得がいかないとか、許せないとか、そういった恨み感情が表にでてくるのが普通である。従前の愛情が深ければ深いほどそれが大きな憎しみとなって裏返しに強烈にあらわれてくるものだ。

華月の場合はどうであったか。

田舎者でテンネンの彼女は、全く普通でない感情に支配されていた。

――ようし、奥さんから権三郎さんを奪い取ってやろう。こちとら花も盛りの『ぴっちぴち』十七歳だ。三十路おばさんに勝ち目はないよ。バーカ！

――――――――――――

ええ？

まったくもって普通でない。

主人公がこうでは筆者はまともな話を続けて書くことなどできない。

ええい！　もう、どうにでも勝手にしろ！

――――――――――――

◇◆◇

千葉県M市の勝野権三郎の住所のもとへ、一通の書簡が届けられた。差出人は、『佐竹コーポレーション　社長　佐竹源治』。

権三郎は美しく整った顔でにやりと笑った。

――佐竹さんよう。百万くらいのはした金でこっちを脅してくると

は、あんたもとうとう焼きが回ったねえ。

――しかも、気色の悪い少女文字だよ。どうやらあんたを見損なっていたようだぜ。はっははは。

封筒を開けてみて権三郎はぎょっとした。

『権三郎さ～ん。お元気？　私。華月よおん。お金返してくれなくていいから、あなたのお嫁さんにしてえ。私、今、想像妊娠中よ～ん。あれ？　産まれるかも。やっだー。うう。ううう。ううううう。』

「……」

――ううううって。なっ、なんだ。こいつ……。

一枚便箋をめくると、そこには続きの文章が書かれていた。

『あーあ。産まれちゃったみたい。ああ、そうそう。秀美ちゃんによろしく伝えておいてね。じゃあ、まったねー！！【華】』

権三郎は美しく整った顔を歪めた。怖いものなしの一流詐欺師権三郎も、予想を覆す手紙の内容に一瞬背中がぞくっとした。

――こいつ、ここまで頭おかしかったか？

決行！

翌日、華月は権三郎の住所を訪ね、勝野権三郎・秀美と記された表札を見つけた。結構な豪邸である。

今の時間は夕方五時。通常であればそろそろ活動開始の時間である。

いきなり呼び鈴を押してインターホンで入室を断られたら元も子もない。華月は権三郎の出てくるところをつかまえて家の中へ入り、奥さんの秀美さんの前で強引に彼をくどいて夫婦関係に傷を入れようと考えていた。ところが六時を回っても権三郎は姿を見せない。

華月はゆっくりと玄関のドアに近づいた。呼び鈴を押す前にドアノブに手を掛けた。

ドアが開いた！

鍵がかかっていなかったのだ。

華月は緊張しながら玄関の中へと入った。

「ごめんください。権三郎さーん」

返事がない。

――鍵がかかっていないのだから、中には居るはずだ。

耳を澄ますと、水を流すような音が聞こえる。住居不法侵入はしたくなかったが、華月は恐る恐る靴を脱いであがり、廊下を音のするほうへ歩いた。右手に浴場がある。かなり広そうだ。

脱衣所を覗いてみると籠のなかには、女性用の衣服が脱ぎ置かれていた。中からは水を流す音が聞こえている。

――秀美のやつだ！　風呂に入っている。

華月の中にはめらめらと闘争本能がかしらをもたげてきた。華月

は今浴場に飛び込んで格闘をすれば、相手は裸だから勝てそうだ、と思ったが、格闘して勝っても全く意味がないことに気づき踏みとどまった。
しかし、何か意地悪をしてやりたくなり、籠にあった衣服全部とバスタオルを脱衣所から持ち出し、台所にあった生ごみ入れに丸めて捨てた。
居間のほうに向かって歩いていったが、どうも人の気配がない。
二階かな、とも思ったが、さすがに他人の家の二階にまで侵入する勇気はない。どうしようか、と閉口していると、玄関から人が入ってくる音がした。

――権三郎さんだ！

「ただいま！」
確かに男の声であるが、どうも権三郎の声とは違う。
華月は廊下で男と鉢合せになった。
「お前は誰だ！」と男。
身長は百八十センチくらいの長身だ。
「あっ、あの。三原華月といいます。勝野権三郎さんの知り合いのものです」と華月。
「何い？　俺と知り合い？　嘘つくな！　権三郎は俺だぞ」
「嘘！　あなたは誰？」
「ばっかやろう！　それはこっちの言うことだ！　警察を呼ぶぞ！」
華月は何が何だかわからなくなってきた。しかし少し冷静になって考えた。

――この人が嘘を言っているようには思えない。

――権三郎さんは、この人の住所と名前を語っていただけなのか……。

――ここは素直に事情を話して許してもらおう。でないと会社に迷惑がかかる。

華月はかなり冷静になっていた。そのとき、浴場の脱衣所のほうから声がした。

「ちょっと待ちなさい！」

懐かしい声。

――権三郎さんの声だ！

衣服もバスタオルも華月に捨てられて、裸の男、いや、女がそこに立っていた。

「私が秀美。この人が本物の権三郎よ」

――私の、私の権三郎さんが『女』？！　だった？　そっそんなあ。

その声と美しく整った顔は紛れもなく、あの華月が恋焦がれた権三郎である。しかし、裸で見る彼、いや、彼女の体は疑いなく女性であった。

故郷のこころを胸に……

単身、東京に出てきてから衝撃的な出来事を次々と体験した華月は、その後佐竹のもとに戻ることなく忽然と行方がわからなくなった。しかし佐竹は今回、華月や秀美と出会った後のさまざまな出来事が、さも何事もなかったかのように、以前と全く同じペースで彼曰く『男と女の何でも屋』の仕事を進めていた。

そうしてあたかも季節が早送りのようにめぐりめぐって、暑い夏が過ぎ秋が過ぎて冬を迎え、翌年も過去何事もなかったかのように春が告げられ、一年後の初夏を迎えた。

ある日、佐竹はＪＲ山手線田町駅を出て第一京浜国道をわたった先の通りで不思議な男が道端に腰掛けているのを見掛けてふと立ち止まった。その男は、妙な感じのあご髭を生やした痩せ型の中年男だった。佐竹は、そんな風変わりな男には一度会えばはっきりと記憶に残るはずであるから、まず初めて会う男であろうと考えたが、それでもどこかで会ったような不思議な感覚が伝わってきた。

佐竹は気になって翌日も、その翌日もその男のいる通りに向かった。何も用があるわけではないので、立ち止まることはなかったが、何度も通りを往復してその男の様子を伺った。

男は毎日夕方くらいから、路上で布製の小さな折りたたみイスに座りヘンな本を売っている。ゴザの上にはジャンルを問わず、薄汚れた古本の単行本やコミック本、絵本、さらには辞書などがずらりと並んでいた。最初のうちは、全く売れないとみえて、いつでも同じものが並んでいるように感じられた。　ところが、ある日ある時からその妙な髭の男の脇にはやたら化粧の濃いサングラスをかけた若い女性が並んで座るようになりだした。ちょうどその頃だ。佐竹には、何故か並べている本の表紙がどんどん変わっていくように感じられるようになった。

――ひょっとしてあんなものが売れてるのか？

一体、いくら位なのだろう、と近寄り覗いてみて佐竹は我が目を疑った。

安いもので二万円。そして、三万円……。さらに高価なものは五万円もの値を付けられた本があった。

そしてある時、佐竹は酔っ払ったサラリーマン風の男が、本を買う瞬間を真近で遂に目撃した。その男が手にとった本は旺文社の漢和辞典と単行本。彼は、その場で旺文社漢和辞典の表紙をめくって何やら真剣に勉強をしている。酔っ払ってふらふらとしながら……。

――その旺文社の漢和辞典にはたしか五万円の値札が付いていたはずだ。

酔っ払った男は旺文社の漢和辞典をもと置いてあった場所に戻し、こんどは単行本の表紙をめくった。小説か何かだろうか。何やら酔っ払った男は真剣に読んでいる。

――冒頭からそんなに夢中になるような本とは一体誰の書いた本だろう。

佐竹はそのことにすごく興味を持ち、脇から男が真剣に見ている裏表紙を覗き込んだ。

男は佐竹に気付き、慌てて本を隠した。

「あっ。だめだめ。冷やかしは厳禁だってさ。だめだめ！」

「……ひっ、ヒヤカシ？」

――ああ、そうかあ。こいつら春を売り買いしてやがる。本が伝言板で隣の若い女は完全なおとりだ。実際の商品のほうは年増のばばあか、三段腹の女がせいぜいだぜ。しかし、それにしても五万とは

ぼったくり過ぎだ。

佐竹はかつて華月を弄んだ男たちに一回につき六万という法外な金額を請求したことをすっかり忘れていた。

いや、法外などといっても、もともと『法』など存在しない。

酔っ払った男は頷いてその場で三万円を髭の男に渡した。

「ありがとうございます！」

髭の男の脇にいた元気な若い女性の声がした。

佐竹にとってそれは決して忘れることのない声だった。

――華月！

その時、男の手に持たれた本の表紙が佐竹の目にとまった。

――『こころ　夏目漱石』

「……」

いい年をした酔っ払いおじさんが、薄汚れた古本の『こころ　夏目漱石』を三万円で買っていった。

佐竹は髭の男の顔を見た。それは、よく見ると付け髭とわかり、前髪に隠れた目は明らかに権三郎、いや、秀美の輝きだった。

佐竹は髭の男に向かって笑いながらぼそっと言った。

「権三郎。いやいや秀美。お前もとうとう焼きが回ったな。そんな田舎の小娘を構っていったいどうするつもりだ。それとも養ってやってるようなつもりか。とんだおままごとだぜ」

秀美は佐竹の正面に向き直って言った。

「ところが、その小娘は、体を売ることだけはしないんですよね。ふふっ、残念でしたね。この世界にいてもこの子は心も体も売らない。何人もの私の仲間がこうして目の前で稼いで金を手にするのを見ていてもですよ。何故だかわかりますか？　佐竹さん。この子の

心は今でも生まれ育った故郷にあるのですよ」

思いっ切りスマイル

秀美は北の空を指差した。

「『震災』でそこには何もなくなってしまったからこそ、はっきりと、そして強く自分を取り戻しているんですよ。この子は。これ以上失うものがないからこそのことですよ。わかりますか？　佐竹さん」

――震災？！

約三ヶ月前に東日本に未曾有の災害をもたらし、今もなお列島に大きな傷跡を残している東日本大地震……。

予想だにしなかった話の展開に佐竹は一瞬たじろいた。

――まさか、華月の両親は、故郷の景色と共に消え去られてしまったというのか……。

口には出せない、その確認の意が通じたかのように、秀美は佐竹の目を見てしっかりと頷いた。

佐竹は再び気を取り直して言葉を返した。

「はは。秀美。お前はそういうの羨ましいんだろう。お前は一度酷い目にでも遭わない限り、決して自分を入れ替えて振り出しに戻すってことができないタイプだ。頑固に過去の自分にすがり付いてやがる。懲りないヤツってもんだな」

秀美はにっこりと微笑んだ。

「そう。私ゃあ、これまで人生何回もやり直してきたつもりでいて、結局同じことの繰り返しさ。たしかに金だけは溜まったよ。そう……。だけどやっぱり人生は損してる。佐竹さんの言うとおりだねえ。私はある意味、強く生きることに臆病な人間かもね」

「何十年も生きてきたような言い方をするない！」
「ははは……」
二人の会話の脇で華月は良く意味もわからずきょとんとしている。華月はしかし、何となく自分に希望の持てない話ではないような気がしてきて、心に灯がともった。
秀美は華月に向き直って言った。
「今夜は雨の予報だし、そろそろあがろうか」
「うん」と嬉しそうに大きく頷く華月。

佐竹は華月を哀れんで彼女の顔を見た。そして少し驚いた。
そこに見た笑顔の表情は、ただ優しく美しいだけではない。決して無理しているわけでもない。気持ちの良いくらいすっきりとして力強い笑顔……。
思いっきりの『スマイル』だった。

佐竹は、華月が自分のもとへ転がり込んできて初めて年を越した頃のことを思い出していた。激しいホームシックが心を襲い、毎日毎日意味もなく泣き続けていた華月。その子が今ではその時の両親を失い、故郷の景色を失っても、自分の中に故郷を取り込んでたくましく人生を歩もうとしている。決して自分を失うことなく……。

佐竹は珍しく目に浮かんだ涙がこぼれないように暗い夜空を仰いだ。

そしてその時、東京の夜空には、その日の雨の予報に逆らうかのように、華月の故郷とまったく同じ満天の星空が広がっていた。

『了』

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0762s/

思いっ切りスマイル

2011年3月31日18時55分発行